

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 川村 祥平



探究活動の充実に思う

岩手県高等学校長協会 会長 中村 智和

(岩手県立盛岡第一高等学校校長)

次期学習指導要領の検討が始まっている。今回の審議事項の一つに、質の高い探究的な学びを実現するための「総合的な探究の時間」の改善の在り方がある。報道によると、総合的な探究の時間の実施により、学力向上はもちろん、学びに向かう姿勢や社会参画意識の高まりがみられるなど、多くの成果が示されている一方で、カリキュラムの設計に困難を感じる、調べ学習で終わっている、育成したい力についての共通認識を十分に持てていないという指摘もあるとのこと。今回の見直しではこういった成果と課題を踏まえ、探究的な学びの質を高めることを目的としているとのことである。

この報道を目にしたとき、現行学習指導要領の方向性が示された平成28年12月の中教審答申を思い出した。答申では、「高等学校、特に普通科における教育については、自らの人生や社会の在り方を

見据えてどのような力を主体的に育むかよりも、大学入学選抜に向けた対策が学習の動機付けとなりがちである」、「高等学校における教育が、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていない」などといった厳しい指摘があったからだ。

確かに、以前の高校では、探究活動がなかなか根付いていない感じがあった。探究活動を重視するスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校でさえ開始当初は、課題研究に多くの時間を割くことに対して、大学入試への影響を心配する声が大きかったように思う。

しかし、SSH事業は開始から20年以上経過し、現在も続いている。「SSH支援事業の今後の方向性等に関する有識者会議第二次報告書（令和3年）」では、SSH指定校の取組が生徒の専攻分野の選択に関して影響を与えたことや、SSH指定校の四年制大学理系学部への平均進学率は、高等学校の全国平均と比較し、男子では約2倍、女子では約3倍となっていることなど、進路面においても好影響を与えていることが示されている。また、探究活動の充実に図られ、優れた科学技術人材の輩出につながっており、このような成果を踏まえ、現行学習指導要領において共通教科「理数」が新設され「理数探究」が開始された。

現在では、SSH指定校以外の学校においても、魅力化や特色化の取組とも相まって、総合的な探究の時間が学校全体の取組になっている。さらに、地元の自治体や企業、研究機関などとも連携し、その成果を魅力ある街づくりの参考にしていく自治体もあると聞いている。このように見ていくと、課題はあるものの、高等学校においても探究活動は確実に発展してきていると思う。今後も探究活動の充実に図り、不確実性が益々高まる未来社会を切り拓く資質・能力を育成していきたい。

令和7年度支部定期総会 今年度事業計画・予算案等承認

令和7年度日本教育会岩手県支部定期総会は、5月31日（土）午後1時から、ご来賓、理事、監事、代議員、支部役員の55名が出席して、盛岡市のサンセール盛岡で開催されました。

開会行事で、支部長から「岩手県支部は全国有数の支部であります。これは会員の皆様、関係機関の理解と支援の賜物であり、感謝申し上げますとともに、今後も力添えをお願いします。令和7年は、昭和100年、戦後80年という節目の年であり、AI元年になるのではないとも言われています。「IGAスクール構想」が提示されICT教育が推進される中、教員の活用技術の向上や子どもの考える力の育成などが課題です。今年度は盛岡で学校心理カウンセラー研修講座を開催します。本支部の課題として、学校数の減少による会員の自然減による会費収入の減少があり、事業や会議の在り方等を

見直し経費削減に努めています。今年度も幅広く教育関係者の会員を有する本支部の強みを生かしながら児童生徒の教育水準の向上や健全育成に鋭意取り組んで参ります」との挨拶がありました。

次いで、ご来賓の岩手県教育委員会教育長佐藤一男氏、岩手県市町村教育委員会連絡協議会会長多田英史氏からご祝辞をいただきました。

続いて議事に入り、議長には、盛岡市立仙北小学校長の村田浩隆氏と盛岡市立大宮中学校長の廣澤正紀氏を選出し、事務局が提案した令和6年度事業報告・決算報告、令和7年度活動方針及び事業計画・予算案が審議され、全ての議案が承認されました。また、今年度は支部役員の改選期にあたり、役員選考委員会で推薦を受けた支部役員（案）について審議され、副支部長に再任の3人と新任内澤英明氏、監事に米慎司氏と熊谷幸一氏、

事務局長に洞口保雄氏ほかの新役員について承認されました。今年度の総会をもって、監事の澤村憲昭氏と飯岡竜太郎氏、事務局長の中川誠悦氏が退任されました。



新旧役員の紹介

記念講演は佐々木幸寿氏 「近未来の 学校教育を考える」

総会終了後、午後2時半から講演会が行われ、東京学芸大学理事・

令和7年度 日本教育会岩手県支部役員

支部長
副支部長

監事

米 慎司
後藤 敏信
照井 英輝
菅原 修一
吉川 健次
久慈 孝
伊藤 彰子
内川千亜希
下川原宏明
菅原 一
中軽米幸治

川村 祥平
新沼 敏哉
高橋ひさ子
玉川 英喜
内澤 英明
熊谷 幸一
川村 憲弘
中村 智和
高橋 健
金澤 広利
佐藤 尚
田代 航
菅崎 晋
吉田 博昭
菊池 康幸
佐瀬 智洋
佐野 理
土川 敦
中村 雅英
洞口 保雄
平澤千麻子
若林 晶子
高橋ひさ子

理事・組織事業部長

佐野 理

広報出版部長

土川 敦

調査研究部長

中村 雅英

事務局長（支部）

洞口 保雄

事務局長（基金）

平澤千麻子

書記

若林 晶子

東北ブロック代表理事

高橋ひさ子

地区会長 事務局長

（会 長）
（事務局長）

盛岡 有馬 賢

佐々木善成

岩手 中田 直雅

宇部 輝彦

紫波 畠山秀一郎

内川千亜希



講演する佐々木幸寿副学長

（講演の概要は次号で紹介します）

副学長・先端教育人材育成推進機構長の佐々木幸寿氏から「近未来の学校教育を考える」学力観、授業、教師はどう変わるのか」と題してご講演をいただきました。

「未曾有の社会変化の中にある現在、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる学習とはどのような学びか」「人口が減少し自治体や地域が弱体化していく中で教育はどのように展開していくのか」「近未来の授業の展開、教師はどのような力を育んでいくのか」などについて、熱く語っていただきました。

令和6年度第15回教育実践顕彰事業

本県から2校応募・高い評価

教育実践の論文募集に、当支部

から北上市立黒沢尻幼稚園長の山本ゆかり氏と、岩手県立西和賀高等学校校長の助川剛栄氏（現岩谷堂高校長）が応募しました。全国から選りすぐりの論文が集まる中、次ページで紹介する山本ゆかり氏の論文が「努力賞」に輝きました。

ここでは「高校魅力化のキセキ」高校の魅力化ビジョンの取組を通して」と題した助川剛栄氏の論文の一端を紹介します。

西和賀高校は、平成30年から入学者定員を40名に削減されました。地域の高校存続の声が強く、町行政共々入学者増に向けた経営戦略・魅力化への取組が急務でした。そのため「いわての高校魅力化ブランドデザインfor2031」に基づき、特色化・魅力化ビジョンを策定し三つのポリシーを明示して実践しています。なかでも興味を引かれたのは、カリキュラム・ポリシーの英数における3グレードでの習熟度別授業による基礎の徹底と、「いのち輝く百年創造塾」

と銘打った総合的な探究の時間を活用した、地域協働を基本とする

地域人材や企業・大学関係者が関わるキャリア教育です。また、個別の進路に合わせた公営塾や添削指導による行政と学校による環境づくりと連携が、生徒個々の進路実現に結び付き、生徒・保護者・地域からの信頼につながっている様子などです。令和3年度からの地域みらい留学等と併せ、多くの統計資料の分析と小規模校でも差別化を図ったコンセプトを整えた戦略で、今年度から異例の定員増という決定（今春67名入学）を導き出したというものです。

本県の実践論文が、毎年全国各地で高い評価を得ていることを誇らしく感じていますし、今年度も皆様による積極的な応募をお待ちしています。なお、受賞された山本ゆかり氏は、11月1日（土）に大阪府で開催の第50回全国教育大会幼稚園・こども園の部で提言いたします。

令和7年度

一般財団法人岩手県教育振興基金役員

理事長		星 俊也	川村 祥平
副理事長		廣澤 正紀	中村 智和
理事		高橋 健	村田 浩隆
常務理事		菅原 壽	新沼 敏哉
監事		後藤 敏信	佐々木 淳
評議員		佐々木 秀毅	嶋 善成
		早川 貴之	谷地 信治
		吉川 健次	坂本 裕克
		上田 淳悟	久慈 孝
		佐藤 尚	

花巻	熊谷 直樹	佐々木 晋
遠野	中浜 艶子	山本千和子
北和	下川原 宏明	佐藤加奈子
胆沢	佐藤 健司	大森 啓睦
江刺	菊池 慧	吉田 博昭
一関西	菅原 正樹	佐々木 伸也
一関東	菅原 一	菊池 桂子
気仙	蒲生 正光	菊池 康幸
釜石	河東 眞澄	佐守 直人
宮古	青笹 光一	熊谷 純
下北	中軽米 幸治	岩間徳次郎
九戸	大芦 賢一	外館 邦博
二戸	筒井 裕一	佐瀬 智洋

いわての教育実践研究～その19～



「自立と社会参加」に向けた地域協働活動

「友達との関わりを大切にしたい保育者の援助」

北上市立黒沢尻幼稚園 園長 山本 ゆかり

日本教育会主催の「令和6年度第15回教育実践事業」に応募した北上市立黒沢尻幼稚園が「努力賞」を受賞しました。黒沢尻幼稚園の取組について紹介します。

1 概要

本園は北上市の都市部に近い住宅地に位置し、地域唯一の公立園です。4年前に現在の園舎に移転し、コロナ禍での新生活は、子どもたち、保護者、そして職員にとっても期待の大きいものでした。



移転当時の園舎

2 主題設定の理由

令和5年5月にコロナウイルス

感染症が5類に移行され、制限されていたことが少しずつ元の形に動き出しました。本園では継続して園内研究に取り組んでいます。この年も、現状を捉えテーマを協議していた時、「子どもたちは夢中になって遊んでいるだろうか」と話題になりました。コロナ禍における生活スタイルが、子どもたちの成長や発達に影響を及ぼしていないだろうか、この数年で起こり続けた変化が、成長していく過程で大きなものになるかもしれないと感じ、ここからもう一度子どもたちの現状を捉え、改めて育てたい姿を明確にして取り組むことにしました。

3 取組の具体

コロナ禍における本園の実践を振り返る

令和2年度「経験の保障」

感染予防から行事の中止や縮小を余儀なくされ、5月の「親子バス遠足」を中止しました。その際、「なぜ親子バス遠足をしてきたのか」を、職員で話し合いました。当日までに年長児が「体操」を通して小さい子に関わり、「年長児

としての意識」を育む行事になっていたこと、年中・年少児は、年長児の姿に憧れや優しさを感じながら行事に期待し、園生活を安定させていく意味もあったこと、そのことを理解し、異年齢での交流を通じて子どもたちの成長を支える工夫を重ねました。

令和3年度「保護者参加の意味」

新園舎への移転を控え、旧園舎最後の行事となる夕涼み会を感染拡大防止のために子どもたちだけで行うことにしました。このことは保護者との関わり的重要性を再認識することになり、運動会や発表会など行事の柔軟な開催方法を探り実践することに繋がりました。

令和4年度「教職員の挑戦」

「感じ、考え、つながりが生まれる保育をめざして」

感染症拡大により異年齢交流を制限しました。クラス内でも、子ども同士の間隔を空けて活動するなど、これまでよりも一層安全を優先しながら生活しました。人との関わりが子どもたちの成長に欠かせないことを理解していた私

たちは、子どもたちも大人も「つながる保育」をめざし、身近な自然に目を向けながら遊べるように環境構成や援助を検討して実践しました。

幼児の現状を捉え研究実践を継続する

令和5年度「感じ考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む」友達との関わりを通して」

アフターコロナとなって社会全体で感染対策の緩和が進み、本園でも、これまで制限していた活動や交流を徐々に再開しました。

新学期、子どもたちの姿を観察すると、「遊びたいことを見つけれずにいる子がいる」「片付けになるとすぐに片付け始め、遊び込めていないのではないか」「面白いアイデアをもっているが、友達に伝えたり一緒に遊び出そうと



輪つなぎリレーもしましたよ。



グループに分かれて一緒に七夕の制作をしました。

黒沢尻北小学校1年生と5歳児の交流会

したりする姿が少ない」という課題が浮かび上がりました。

そこで友達と関わることで様々な考えに触れ、これまでよりも幼児自身がたくさん感じ、考えながら夢中になって遊んでほしいという研究をスタートしました。主題、副題の共通理解のため、「感じる」「考える」の意味は辞書を参考に「様々なものを見たり聞いたりしたときに生まれる心の動き。五感を通して強く心が動くこと」「知識や経験などに基づいて、筋道を立てて頭を働かせること。新たなものを工夫すること。思いつくこと。問いをもつこと」「そして「感じ、考える」については、「人や物に主体的に関わりながら様々な心を動かし、自分なりのやり方で楽しむ。今までの経験を思い出したり、疑問に思ったり関わったりしながら遊ぶことを楽しむ」と捉え、この姿を年度の終わりにまで目指す姿として取り組みました。

実践では、子どもたちの姿を丁寧に読み取り、環境の再構成や援助の方法を検討。繰り返し話題になったのは、年齢に応じた遊びになっていないこと、友達との関わりがもてていないことでした。コロナ禍にマスク生活や人との関わりに制限を設けたことは事実です。子どもたちの育ちを「なぜだろう」と考える前に、コロナ禍を理由にする前に子どもたちの姿を受け入れ、「必要な経験は何か」保

育者は、どのように関わるとよいのか、そのことを中心に考え実践しました。保育者が一人ひとり目を向け、興味や関心を引き出す保育を積み重ねたことで、子どもたちは少しずつ面白いと感じた遊びで繰り返し遊び、考えたことを試し、難しいと感じた時には友達を真似、友達に聞いて試しながらまた遊び、自分の考えを広げるようになり、夢中になって遊ぶ姿へと変容していきました。

この研究実践は、岩手県や全国国公立幼稚園・こども園教育研究大会で研究主任の高橋教諭が発表しました。幼児は繰り返し満足するまで興味があることを楽しむと周りに目が向き、友達の思いや考えが加わるとより「感じ考える」姿が育まれ、このような体験の積み重ねが深い学びへと繋がる、そのことが小学校教育の基盤となることを改めて実感した実践となりました。

令和6年度

「感じ考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む」言葉のやりとりを大切にしたい援助を探る。

そして昨年度は、前年までの実践を踏まえ、さらに研究を進めました。

保育者を頼りに友達との遊びに発展しにくい姿や、保育者との会話で満足し、友達には一方的に伝えたり思いを言葉にできずにいたりする姿から、「友達と」感じ、

考え、より夢中になって遊ぶ幼児となるよう、子どもたちの言葉のやりとりを大切にしたい保育者の援助がどうあればよいかを探りました。幼児が、友達と夢中になって遊ぶようになる過程を本園の「ステップ表」として作成し、この表を活用して子どもたちの姿を客観的に捉え、必要な経験や援助の方向を明確にすることができました。

ステップ表（抜粋）

	幼児の姿	教師の援助と環境構成
1	教師と自分のしたい遊びを見付けて、満足して遊ぶ姿	一緒にいて安心する、一緒に遊んでくれるなど「一緒に」を軸に信頼関係を築けるような援助や環境構成
2	教師を支えとした小集団で、興味のある遊びを繰り返し楽しむ姿	教師が仲立ちしながら、互いに思いを出し合えるようにしたり時間を確保したりしていく
3	友達と同じ目的に向かって工夫したり、協力したりしながら遊びを展開する姿	一緒にイメージを実現していく楽しさややり遂げた達成感を、友達や教師と共感できるようにする

ステップ表と一致しない幼児の姿も、昨年度の経験を生かし、その子の姿をあるがままに受け止め、必要な経験を探りながら、友達とのやりとりを楽しむ姿へと導いています。

実践を通して、子どもたちが「伝えたい」という思いをもつためには、保育者との安定した関係が土台となること、保育者を拠り所としながら好きな遊びを楽しみ、様々なことを感じ、考える中で、

4 実践を通して

コロナ禍がなければ…と考えることもありますが、この経験がこれまでの教育や保育を再考する機会になったことも事実です。当たり前というのではなく、私たち保育者は現状の子どもたちの姿から学び、目指す姿への変容を願って実践を重ねていかねばならないと改めて思いました。

「伝えたい」思いが生まれることを改めて感じるとともに、忘れてはならない感覚だと思っています。



4歳児のリレー・・・
バトンをしっかりとって走ります。



3歳児のしっぽ取り鬼・・・
あと少しで取れそう

園庭を走り回って遊ぶ子どもたち

地区会だより

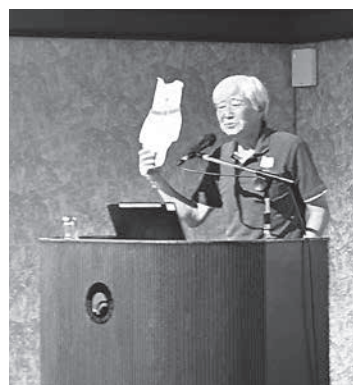
花巻地区会



総会の様子

7月5日(土) ホテルグランシエール花巻で花巻地区会の総会・研修会・並びに懇親会を開催しました。当日は、ご来賓の皆様をはじめ、終身会員や小・中・高の会員73名が出席しました。

研修会では、大館市教育委員会前教育長の高橋善之氏を講師に



高橋氏と観光キャラクター

お招きし「教育のイーハトーヴをめぐして〜ふるさとキャリア教育、14年の軌跡〜」と題してお話を頂きました。賢治さんのお導きで花巻市で講演が出来る事を喜んでいただきました。教育長になった頃は、「自分のふるさとは何もない」という大人が多くいることに子どもたちも希望を失うと考え、キャリア教育に重点を置いたそうです。賢治さんの教育のあり方に感銘を受け、教育のイーハトーヴをめぐして、「学力」「地域のために何をすべきか考えている児童生徒」「地元就職率」、どれも軒並み向上させた素晴らしい実績があります。

高橋氏は、80歳の賢治さんの教え子が65年前の授業の再現をした本を参考に、我々に授業をなさいました。命をどう輝かせるのかと問われているようでした。

「権力と財力があれば一時的に人を動かすことは出来るのです。が、人を変える力はないのです。人を変える力をもっているのは、教育だけです」と締めくくりました。教育にかける熱い思いが伝わり、有意義な研修会となりました。(事務局長 佐々木 晋)

岩手教育振興基金

寄附者御芳名

(敬称略)

○岩手県高等学校長協会

▼花巻地区 (1名) 佐藤宣昌

▼胆沢地区 (2名)

小山智弘・多田拓章

▼気仙地区 (1名) 菊池千恵子

▼宮古地区 (1名) 大村東道

▼下北地区 (1名) 磯部隆宏

▼九戸地区 (1名) 尾崎芳彦

▼二戸地区 (2名)

高橋直樹・細川英人

(9名)

○岩手県高等学校副校長協議会

▼盛岡地区 (5名)

小池光浩・大前昌己

湊慎一・本間清香・青柳チカ

▼紫波地区 (1名) 小野寺丈晴

▼花巻地区 (1名) 菊地健

▼一関西地区 (2名)

高橋伯枝・菊池大輔

▼釜石地区 (1名) 竹田友一郎

▼宮古地区 (1名) 吉岡佐和子

▼九戸地区 (1名) 阿部真弓

▼二戸地区 (1名) 中田裕治

(13名)

今回は、(公財)岩手県育英奨学会への助成金1万円のご寄附をいただいた岩手県高等学校長協会の令和7年度新任校長、同じく1万円のご寄附と岩手県教育振興基金へ5千円のご寄附をいただきました岩手県高等学校副校長協議会の令和7年度新任副校長の正会員をご紹介させていただきました。

温かいお志をお寄せいただき、多額のご支援・ご協力を賜りましたことに衷心より感謝申し上げます。次号では、県小学校長会・県中学校長会・県小中学校副校長会の寄附者を掲載します。

公益社団法人日本教育会 令和7年度第51回総会及び講演会報告

公益社団法人日本教育会の令和7年度第51回総会は6月28日(土)東京都千代田区「主婦会館プラザエフ」で開催されました。

支部からは川村祥平支部長と高橋ひさ子副支部長が、代議員として太田浩隆氏(岩手県小中学校長会・仙北小学校校長)と照井英輝氏(岩手県中学校長会・厨川中学校校長)が出席しました。最初にビデオに

よる鷲山恭彦会長の挨拶があり、続く議事では①令和6年度会務及び事業報告の件②令和6年度貸借対照表等の件③令和7・8年度役員(理事・監事)選任の件④令和7年度第51回総会宣言(案)の件などが審議され全ての議案が満場一致で承認されました。総会宣言の読み上げは、代議員の中から照井英輝氏が行いました。また、常

スポット その187

照井英輝校長先生は令和6年4月に第28代校長として本校に着任しました。今年度の教職員ス



ローガン「傾聴・協動・習慣」(キャッチフレーズ・苦勞を厭わず 理想を求め やり遂げる 学を楽しみ 笑いあふれる 厨川中学校)と掲げました。学校経営方針の重点は「子どもの権利条約」を尊重した学

岩手県中学校長会 会長
理事 照井 英輝 氏
(盛岡市立厨川中学校 校長)

活動を重ねています。今年度は岩手県中学校長会会長として岩手県の子どもたちのためにご尽力されています。多忙な毎日をごさ

校長会会長として岩手県の子どもたちのためにご尽力されています。多忙な毎日をごさ

(副校長 菊池 啓志)



宣言を読み上げる
照井英輝 氏

任理事として高橋ひさ子副支部長が再任されました。

総会終了後、臨時の理事会が行われ、退任される理事長笹尾幸夫氏の後任として田中保和氏(大阪府支部長)が選任されました。

引き続き、「第15回教育実践顕彰受賞者表彰式」が行われ、最高

賞である「会長賞」(賞状と奨励金10万円)の荣誉に輝いた宮城県

宮城野高等学校と群馬県立尾瀬高等学校に笹尾理事長から賞状と奨励金が授与されました。

研修会では、文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤久慶氏をお招きし、「生成AI時代、GIGAスクール時代の学習指導要領改訂」と題してご講演をいただきました。

講演の趣旨は、昨年12月の中央教育審議会への諮問にかかる2点についてでした。資料や関連図書等を提示しながら、学ぶ子どもたちの認知特性や状況等の多様性を包摂し、誰一人として子どもを取り残さないこと、意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題であると述べられました。その実現には、「GIGAスクー

ル構想等によるデジタル学習を基盤とした学びが一層重要になってくる。実体験の格差やデジタル化の負の側面等を指摘する声もある『デジタルカリアルか』といった二項対立に陥ること無く『デジタルの力でリアルな学びを支える』との基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って、積極的に取り組む必要がある」と話されました。

諮問理由に関わっておさえておきたいトレンドは①人口減少・少子高齢化②グローバル化③多様性&包摂の重視④デジタル化(Digital)⑤変化の激化、不確実性の高まり⑥人生100年時代。

諮問で述べられた課題は①主体的に学びに向き合えていない子の増加②学習指導要領の浸透が道半ば③GIGAスクール構想は緒に就いたばかり④働き方改革との両立・学校現場の負担軽減です。

月刊「日本教育」の2・3月合併号に「次期学習指導要領」諮問文に込めたこだわりの一端」と題する武藤久慶課長の文章が、諮問原文のQRコードとともに掲載されていますので合わせてご覧ください。



教育課程課長
武藤久慶 氏

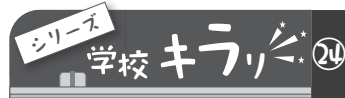
「高小応援団に支えられて」

宮古市立高浜小学校 校長 似内 織江



海岸清掃も大成功 笑顔で記念撮影

明治9年に開校した本校は、明治19年に金浜小学校と統合し、創立139年を迎えました。宮古湾に面した高台に建つ本校は、海や自然と共存しながら生活してきた地域にあります。一方で、チリ地震津波や東日本大震災で被災し、自然の恐ろしさも経験している地域でもあります。この両面を踏まえた地域の特性が、本校の教育活動にも繋がっていると感じます。今回は、二つの取組について紹介いたします。



潮干狩りと海岸清掃、カキの養殖
この三つの学習は、毎年取り組んでいるものです。宮古漁業協同組合、宮古海上保安署、宮古水産振興センターの方々の協力のもと、子どもたちが宮古湾の素晴らしさや水産業の魅力を実感する良い機会となっています。

河南中学校区小中合同避難訓練

この避難訓練は、登校時に津波から命を守るために、河南中、磯鶏小、そして地域の方々と合同で行っています。学校外で様々な方々と避難訓練を行うことで、子どもたちはより切実感をもって訓練に臨むことができ、一人ひとりが命を守る行動力や判断力を高める大切な機会となっています。



高台にある備蓄倉庫を目指して避難

の二つの取組は、保護者、地域の方々の協力があつてこそその活動であり、毎回、子どもたちも私たちも多くのことを学ばせていただいております。

また、歴代の校長先生方にも、ご協力をいただきながら様々な取組を進めております。第15代校長宮昭三郎先生は、国際竹とんぼ協会に所属されており、全校児童にスーパードンぼを制作し、プレゼントしてくださいました。子どもたちはスーパードンぼの魅力に浸りながら、夢中になって遊んでいます。第21代校長宮城貞子先生には、毎年、「はまかせの会」という読み聞かせボランティアの代表として来校していただいております。宮城先生は「私はいつでも高小応援団だから」とおっしゃってください、高浜小の元気の源となっています。

37名の子どもたちは、高小応援団の皆様の愛情を一身に受け、学校や地域が大好きな子どもたちに成長しております。閉校まで約8か月となりますが、高小応援団の皆様には感謝の気持ちをもちながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。そして3月、本校の校歌の一節にある「希望の窓」を、子どもたち一人ひとりが思い描き、夢と希望をもつて一歩を踏み出すことができるように、教職員一丸となって教育活動を推進して参りたいと思います。



「校長先生、誰かがぼくのピーマンに、空気を入れました」「大きくなあれ」って、おまじないをかけたなら、きゅうりが急に伸びました」「きゅうりの曲がる方向は、どうやって決まるのだろう」「トマトの実は、下から赤いおいしさがたまっています」朝の学校農園は、子どもたちの五感を働かせた素敵な気分と、みずみずしい感性から生まれる新鮮な表現にあふれている▼この子どもたちの様子を見るのが、一学期後半の私の最高の楽しみである▼今朝も、ピーマンを囲んで、何者かが空気を入れたのか、外側の部分が大きくなったのかを一生懸命に考え話し合う子どもたち▼新しいことを自分で発見することのうれしさ、自分で知識や経験をつなぎ合わせて考えを創ることの楽しさこそが学びの原動力であると改めて感じる▼この素晴らしい感性をもつ子どもたちを、既成の概念で固めることなく、個性豊かに伸ばしていきたいと思う毎日である。

(盛岡市立河北小学校)

校長 君塚 裕子